

135 年前に生きた曾祖父「村上熊作」と枝幸

～「枝幸町史」とトッド夫人の旅行記「Corona and Coronet」から～

吉宮 仁美（旧姓：村上）

元横浜市職員（保健師）

要旨 171 年前（嘉永 4 年、1851 年）の幕末に生まれ、135 年前（明治 20 年、1887 年）に枝幸に移り住んでから昭和の初めまで、時代の動きを背景に曾祖父「村上熊作」は何をきっかけに枝幸に行き、どの様に枝幸で生きたのか「枝幸町史 上下巻」（枝幸町史編纂委員会 1967；1971）と旅行記「Corona and Coronet」（Todd 1899）を基に、熊作の人生を 3 期に分け掘り下げて考察した。それは曾祖父の波乱に富んだ人生を通して、北海道及び枝幸の幕末から近代化のあゆみに関する研究である。「枝幸町史 上下巻」（枝幸町史編纂委員会 1967；1971）に記述された事象は出来るだけ根拠のある資料をさがして確認するようにした。曾祖父は明治 29 年（1896）、枝幸に日食調査で来日していた米国の天文学者デイヴィッド・P・トッドと妻メイベル・L・トッド（以降トッド夫人と呼ぶ）と親交があったことから、私の視点は北海道から米国まで広がって、沢山の興味深いことを見出したのでここにまとめた。

キーワード：旅行記「Corona and Coronet」、枝幸町史、松前町史、皆既日食調査、エミリ・デキンソンの詩集、アイヌ、ピーボディ・エセックス博物館

1 はじめに

写真 1 は旅行記「Corona and Coronet」（Todd 1899 pp.324-325、以降「C & C」と略す）に掲載されたものである。中央に座っているのは村上熊作（1851-1929、以降熊作と呼ぶ）、右隣は妻のきん（1853-1926）左隣は 9 歳の次女いか、妻きんの右隣は米国人のトッド夫人（1856-1932）そして夫人の右隣に立っているのは夫の天文学者デイヴィッド・トッド（1855-1939）である。

私は熊作のひ孫にあたり、枝幸町から車で四時間半の南富良野町に生まれ、今は結婚して横浜に住んで夫婦共に還暦を過ぎた。

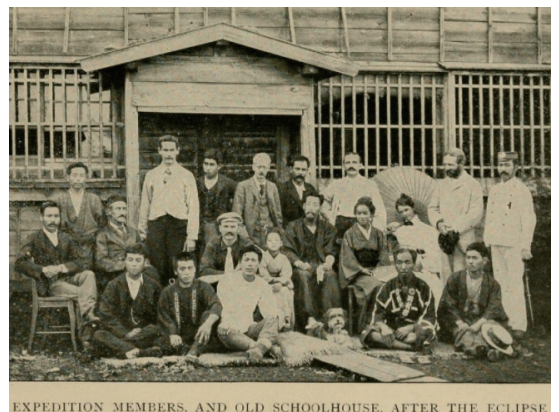


写真 1. 日食観測後の観測メンバーと旧校舎 (Todd 1899)。

毎年、富良野の介護施設に住む母親を励ましに北海道を訪れるが、2020年から夫が家系図づくりを始めたことから曾祖父が生まれ育った場所に立ちたいと思い2021年夏、枝幸町へ旅立った。

そして、戦前の住所が現在の何処にあたるのか等を調べるため枝幸町立図書館を訪れたところ、「オホーツクミュージアムえさし」を紹介された。私はそこで、真っ先に手に取った「枝幸町史 上巻」(枝幸町史編纂委員会 1967)の目次を眺めると、私の眼に曾祖父「村上熊作」の名前が飛び込んできた。熊作は枝幸町史に「草分けの群像」33人の一人として描かれ、更に十数か所のページにもその名を見ることが出来た。大変、驚き興奮するとともに、枝幸に42年間、生きた曾祖父の姿に誇りと尊敬の念をもった。そして、曾祖父の破天荒ではあるが、その「生きざま」に関心が湧いた。そこで、熊作の人生を

- ①松前福山で武士の家に生まれ幕末の混乱に生きた時代<0歳~26歳>
- ②人生の模索とどん底を味わった時代<27歳~35歳>
- ③枝幸に人生の活路と充実をみいだした感謝の時代<36歳~没79歳>

という3期に分けて、考えてみた。

調査対象は「枝幸町史 上下巻」(枝幸町史編纂委員会 1967; 1971)はもちろん、枝幸町が舞台になった皆既日食調査(明治29年、1896年8月9日)の為に米国から、天文学者の夫と共に枝幸に来て熊作と親交のあったトッド夫人の「C & C」(Todd 1899)更にはトッド夫妻が枝幸を去る際に、19世紀最高の女流詩人と言われるエミリ・ディキンソンの詩を書いた揮毫を熊作に贈ったことから「エミリ・ディキンソンの詩集」(中林 1986)や映画や本などである。更に、熊作が育った松前福山や彼が出掛けた上海、樺太、小笠原の当時の事も調べた。

不幸にして、枝幸大火(昭和15年5月11日)により枝幸にあったそれ以前の貴重な資料や写真等が殆どを失われた中で、トッド夫人の「C & C」(Todd 1899)の記録や写真は当時の枝幸を知るうえで、大変、貴重な資料であることは言う

までもない。また、昭和24年(1949年)の松前大火(松前町役場が火元で松前城が焼失)により、それ以前の「村上家」の除籍謄本が焼失と町役場から連絡があり、残念に思っていたところ、芦別市に住む村上辰四郎(熊作の三男):辰雄(辰四郎の長男)家に松前大火の前年に作成されていた村上一族の広範囲な家系図(村上 1948。以降「芦別家系図」と呼ぶ)が保管されていた。これも入手出来たのは大きな幸運であった。

私は今回の枝幸への旅から、今度は135年前の枝幸に生きた熊作を知るための「時空を超えた旅」にでかけることにした。

尚、現在を生きている熊作の子孫の立場に立つと、今回の熊作の人生のまとめ方に異論やご意見があるかもしれないが、私なりのまとめをした事をお許し願いたい。また敬称は略させて頂いた。又、(歳)内は熊作の当時の年齢を示す。そして、引用文献中の注釈は()として筆者が注記した。

2 熊作の人生の生き方

①松前福山で武士の家に生まれ幕末の混乱に生きた時代<0歳~26歳>

熊作は2021年に放映のNHK大河ドラマの主人公渋沢栄一(1840-1931)と同じ時代に生きたのは興味深い。熊作は松前(福山)で生まれ育った。松前町は北海道の最南端に位置し、西は日本海、南は津軽海峡に面している。(明治以前の「松前」は「福山」と呼ばれていた。)

<熊作の祖先>

「(村上熊作は)松前福山の藩士村上権右衛門の三男に生まれた。その先祖を尋ねると…戦国武将、村上義清であるという。」(枝幸町史編纂委員会 1967 p.528)

この記述を基に、松前町教育委員会に先祖の名前が松前藩の資料にあるか、問い合わせをしたところ、熊作の祖父三代目権右衛門は傳治澤町周辺数ヶ町の「町名主」、父親四代目権右衛門とその長男太一郎は「足軽(武士)」と記録に残っている事が確認出来た。

「町名主」は城下町などで藩による町行政にお

登場人物 関係図

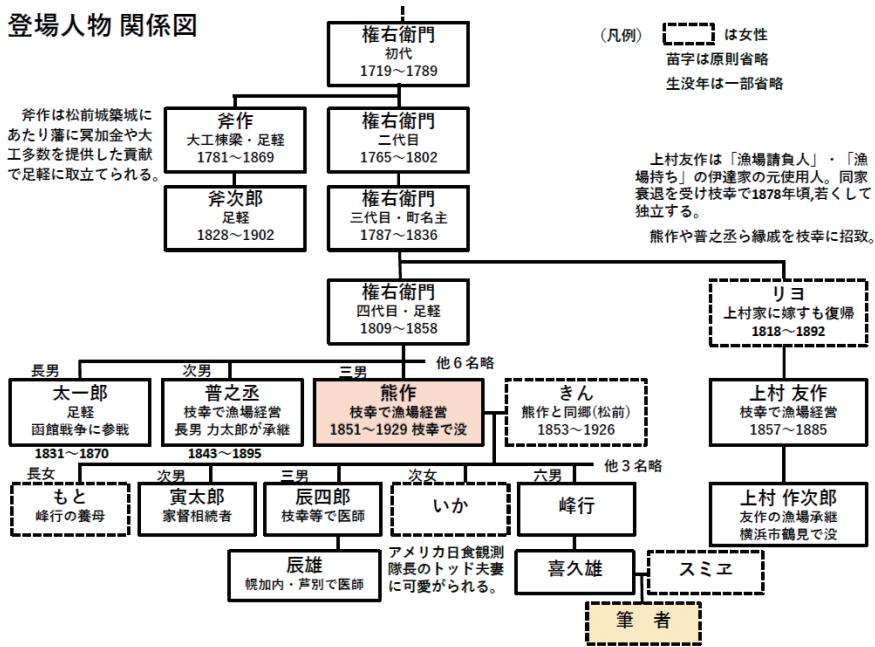


図 1. 登場人物関係図：村上誠一作成の芦別家系図（1948）に除籍謄本（枝幸町 2021、南富良野町 2021、富良野市 2021、上富良野町 2021）を基に吉宮 徹が加筆（2022）。

いて「町年寄」のもと、その町内の徴税、紛争解決などを担った町役人であった。

「松前町史通説編第 1 巻下」（松前町史編集室 1988 p.608）によると、「(町名主は) 町年寄のような有力上層の町人ではないが決して下層でない町民のなかから選ばれ、その身分も町奉行所限りではなく、町年寄・御用達に次いで藩の機構のなかで位置づけられていた。…職務の範囲の広さは町年寄と変わらない。…(町名主は松前) 城下を五地区に割ってそれぞれ担当していた。(熊作の祖父の) 担当地区は 632 軒、2467 人(1838 年当時)。」

なお松前町教育委員会の回答を受けその後、別途入手した「松前藩と松前一松前町史研究紀要 6 号」（松前町史編集室、1974 p.60）によると、図 1 のとおり、三代目権右衛門は文政 5 年(1822 年) 4 月 13 日に「町名主」に就任、天保 5 年(1835 年) 11 月 6 日に病没する迄、約 13 年間、「町名主」仕事についていたことが分かった。

また、同じ資料で熊作の曾祖父二代目権右衛門の弟斧作は分家し大工の棟梁をしており、松

前城(別名: 福山城)の築城(着工 1849 年、完成 1854 年)の折に莫加金に加え多くの大工を集めるなどの大変な功績を認められ、嘉永 7 年(1854 年) 12 月 14 日に「足輕(武士)」取立てとの記述(松前町史編集室 1974 p.63)が見つかった。当時、松前藩は財政難により「築城の為に町民、百姓が藩に寄付をした場合は足輕に取立てる」旨の達しを出しており(松前町史編集室 1997 p.108) 足輕に取立てられたのは、この達しを反映したものである。

<熊作の実家>

熊作の実家は、松前城から東に 1km の傳治澤川河口付近の福山傳治澤町(現在の「松前町月島」地区)にあり、家の前は砂浜に続き津軽海峡が広がっている。熊作は小さい頃から人々が漁業を営んでいる姿を目にして育ったのであろう。しかし、熊作の父親は 49 歳の時に病死した。その時、長男太郎は 26 歳、次男晋之丞(しのじょう)は 14 歳、熊作は 7 歳、姉妹は 16 歳、6 歳と 1 歳の計 6 人の子供たちを残して亡くなった。家督を継いだのは 27 歳の「足輕」の長男太



図2. 旧斜里山道の概略ルート。「斜里町史」(斜里町史編纂委員会 1995 p.152 及び p.630) の記述を参考に吉宮 徹が作成 (2022)。

一郎であった。

<箱館戦争と西南の役>

「熊作は明治維新の動乱による藩の内訌には大いに苦慮したが、明治二年(18歳)には官軍(新政府軍)に加わって脱走軍との悪戦苦闘の渦中に入った。やがて戊辰の役も平定し、もう武士の世ではないといち早く見限りをつけ、実業によって身を立てようと、炭焼きになったり、駄送馬を追ったりした。その後函館近海小廻船の船頭にもなったが、明治十年(26歳)九州に西南の役が起ると早速征討軍の募兵に応じて東京に上った。」(枝幸町史編纂委員会 1967 p.528、傍点筆者)

明治維新の過程では藩は官軍派(新政府軍)と旧幕府軍派(旧幕府軍)に分かれ混乱したが、熊作は明治2年18歳の時に、官軍に加わり榎本武揚、土方歳三らの幕府脱走軍と戦った(箱館戦争 慶応4年1868年～明治2年1869年)。

足軽の長兄太一郎はこの箱館戦争で怪我をしたのか終戦の翌年、青森石崎村(現:外ヶ浜町)にある妻の実家で「入湯の砌(みぎり)没」と「芦別家系図」(村上1948)にある。

その後、熊作は26歳の明治10年(1877年)、西郷隆盛が蹶起した西南の役が起ると、妻と2人の子ども(4歳と2歳)を松前福山に残し、征討軍(新政府軍)に参加すべく募兵に応じて東京

に上がった。「松前町史年表版」に「1877年6月札幌、函館の両庁管下の士族600人を募り屯田予備兵を編し、東京に送る(9月帰る)。旧松前藩士多数応募。」(松前町史編集室1997 p.190)と記述があり、熊作もその一人だったと思われる。

熊作が多感な年齢の時に国内では内戦が続き、スケール感は異なるが、渋沢栄一のような先進的な考えで「もう武士の世ではない」と判断し、武士としての人生を閉じた。

② 人生の模索とどん底を味わった時代 <27歳～35歳>

枝幸で明治11年(27歳)はナマコ漁、明治13年(29歳)にはサケ漁に従事し、漁期を終えて道南の松前福山に帰宅する模様が記述されている。

<冬季帰省の折に斜里山道で遭難>

「二十六里(104km)ノ山道二掛り、時既ニ冬季、積雪数尋道路ヲ埋メ、為ニ途方ヲ失シ、雪中ニ宿シ、即夜日蓮上人ノ悪夢ニ依リ万死ニ一生ヲ得テ、標津ニ出テ根室ニ達スルコトヲ得テ、無事福山ニ帰ル」という難行を体験した。(枝幸町史編纂委員会1967 p.529)

図2のとおり、枝幸から紋別・網走を経て斜里山道に入り遭難したが、九死に一生を得て標津を出て、根室に到着し、根室から船で松前福山に帰宅したとあるが、当時は最果ての枝幸から松前への帰省手段としては、根室までは冬のため船は使えず徒歩だけであったのだろう。北海道の極寒の山道、それも積雪による道なき道を歩くという。なんと、無謀な人だろう。

<枝幸に行った理由>

何故、遠方の枝幸に出かけて漁をしたのだろうか。

熊作が初めて枝幸に行った明治11年(27歳)の数年前から江戸時代以降、宗谷地方の漁場経営を担った松前福山に店をもつ伊達家の衰退が顕著になり、その使用人達が独立し漁場を自営するようになった。その使用人の一人に熊作の従弟の上村(かみむら)友作(熊作より6歳下)がいた(枝幸町史編纂委員会1967 p.392)。それは、「芦別家系図」(村上1948)にあった人物と名前が

合致した。熊作そして実兄の晋之丞も友作に、枝幸が可能性のある大きな漁場だとして誘われたのではないだろうか。枝幸町史上巻にもそのような人の動きが記されている。

「移住の動機をおよそつぎの三態に大別することができる。第一は、佐賀長兵衛の例に見られるように藤野・伊達・楠原という漁場もちの系譜につながるもので、彼らは枝幸沿岸の実態と漁場開発の可能性についてすでに予備知識を持っていたのである。漁場経営についても十分な経験を積んでいるので事業は着実に伸び、つぎつぎ縁故者を招致して未拵がりに地盤を築き上げて行った。この当時の移住者について、『次で伊達ナドノ旧奉公人來り（清水・佐々木・上村・中山）…』…第二には…」（枝幸町史編纂委員会 1967 p.566、傍点筆者）

ただ、熊作が枝幸に定住するのは、友作が妻子を残して早世（明治18年、28歳）した後の明治20年（36歳）の時、既に晋之丞が漁場を自営し始めていた時である。また、次の記述もある。

<人生のどん底>

「明治十四年（30歳）には樺太に渡って越年し、十六年（32歳）から二年間福山で荒物商（日用雑貨商）と回漕店（船や荷馬車をもち、内外の荷物などを扱う運送会社あるいは商店）を営んだ。十七年（33歳）のこと、鯨肉一〇〇石（約18,000L）を買い入れ、東京に向けて輸送の途中、その船が暴風にあつて熊作の荷も海中にほうり出されてしまった。そこでその荷がどうなったかを確かめるため、鮭鱒等を仕入れして上京したが、おり悪しく魚価の大暴落に遭って元金もなくしてしまった。こうして無一文になったうえに重病にかかるという窮境に追い込まれたが、大阪の島田という人の援助でようやく一条の活路を見出すことができた。そこで輸送会社の船員となって小笠原島に渡り、その後外国船に雇われて横浜上海間を往復し、一年間船員生活を送ったあと、十九年（35歳）になってようやく福山に帰宅することができた。」（枝幸町史編纂委員会 1967 p.529）

熊作が損失を被った「魚価の大暴落」は不換紙

幣の回収による所謂「松方デフレ」の影響と思われる、これは全国各地で暴動も引き起こした。

<上海航路（外国船）と小笠原航路で船員として働く>

33歳時の人生のどん底では経済的にも、精神的にもかなりのダメージを受けたと思う。それでも、人に助けられながら、翌年の34歳時には外国船の船員として小笠原、横浜、上海に出かけるなど、逞しく生きていく。松前で待つ妻子を思ったのか、そのエネルギーはどこからくるのかと思う。

なお横浜にある日本郵船歴史博物館によると、小笠原航路は丁度、熊作が小笠原に行った年の明治18年（1885年）10月に東京府庁から日本郵船への命令で開設となった。当時、東京と小笠原間は片道2-3日程度かかり、年4回の不定期便だった。しかし当時の船員名簿は無く、熊作がこれに乗っていたかは不明とのことである。一方、横浜—上海航路については、外国船籍で外国人の船員による運航である。熊作が乗った明治18年ではないが、明治32年（1899年）のスケジュールでは、横浜港を水曜日正午に出発し、各地（神戸、門司、長崎）を寄港し上海港の到着は水曜日午前になるという。横浜港から上海港まで停泊時間も含めると片道1週間かかっている。明治18年（1885年）当時も運行スケジュールに大きな違いはないという。

この1年間の間に、熊作は横浜～上海（往復2週間）と不定期な小笠原島（往復1週間）を複数回にわたり、船員として精力的に働いたと思う。

<樺太探検>

「この年（明治19年35歳）木田某に雇われて樺太の漁場で働いたが、漁期が終ってから島内を探検しようと思立った。すなわち白米五升（50合、約7.5kg）を持ち、陸には道もなく川には舟もない未開地二四五里（980km）を四二日かかって踏破し、ようやく日本領事館に辿り着いて二・三日間久津原領事の官邸に滞在した。（平均23km/日）。そこからまた七〇里（280km）を跋涉し、九月船で小樽に帰り着くという、いかにも彼らしい探検行をやったのけた。」（枝幸町史編



図3. 樺太：木田長右衛門の漁場のタイライカと日本領事館との位置関係。

纂委員会 1967 p.529)

この「木田某」とは「新北海道史」(北海道 1971 p.540)に登場する「函館の漁業者 木田長右衛門(旧漁業地タイライカ)」と思われる。

新北海道史(北海道 1971 pp.539-541)によれば、明治8年の樺太千島交換条約で樺太がロシア領になった後でも、条約上は日本人も継続して漁業ができることになっていたが、日本政府(開拓府)がロシア(人)との紛争を避けるために国内向けには樺太での漁業を禁止した。この措置に対し木田の名を例に挙げ、多くの漁業者が漁獲豊富な同地での漁業をもとめ出願したため、開拓府も折れて明治9年には漁業を認めた経緯が書かれている。

熊作は245里(980km)を踏破し、更にそこから70里(280km)と合わせて1260kmを42日間以上の道なき道を探検にいったという。1260kmというと、稚内から京都までの距離に

あたる。一日平均約23kmの距離を7.5kgの米を背中にして歩いたという。驚く距離だ。図3のとおり、木田の漁業地であるタイライカ(現ポロナイス市)は樺太の中央部東海岸である。ここから領事館のあったコルサコフ(日本名大泊)までは直線距離で300km、陸路最短距離で80里(320km)ほどであり、町史に書かれた245里(980km)とは大きく異なる。漁場を探して西海岸にも行ったのだろうか。

横浜―上海間や小笠原まで1年もの間、外国船で働いたり、樺太の漁場で働きながら樺太探検をしたり人生模索の旅にでている。あの時代に熊作が夢を求めて、日本から飛びだしていく勇気や行動力にバイタリテイあふれる人だと思った。見知らぬ外国や外国人の文化に接し、経験することは、島国日本だけで暮らしている人よりも、少し広い視野をもてたのではないかと思う。

色々体験しながら、一方では「どう生きていこうか」ともがいていた時代ではなかっただろうか。

道南の松前福山に幼い子供たち(長女8歳、長男6歳、次男3歳)を妻にまかせて、その家族と母親はどれほど心配したことだろうか。

「彼は『天性豁達気質磊々(著者注：てんせいかったつきしつらいらい)』つまりからっとして物に拘泥しない性格なので、ついしたい放題のことをしては、数回父母の勘気を受けた。晩年は行状も正しくなって事業に励み、生母の送葬(44歳)のときなどは、兄弟に率先して一人で奔走したという。」(枝幸町史編纂委員会 1967 p.530)

■エミリ・デキンスンの詩

「成功はもっとも甘美におもわれる

一度も成功しないひとには。

甘露の味がわかるためには

もっとも激しい渇きが必要。」

(1859年 No67) (中林 1986 p.57)

熊作は人生の甘露の味(成功)を分かろうと、命を懸けて色々を試みたのであろうか。

③枝幸に人生の活路と充実をみいだした感謝の時代<36歳～没79歳>

「明治二十年(36歳)ふたたび枝幸に渡って、

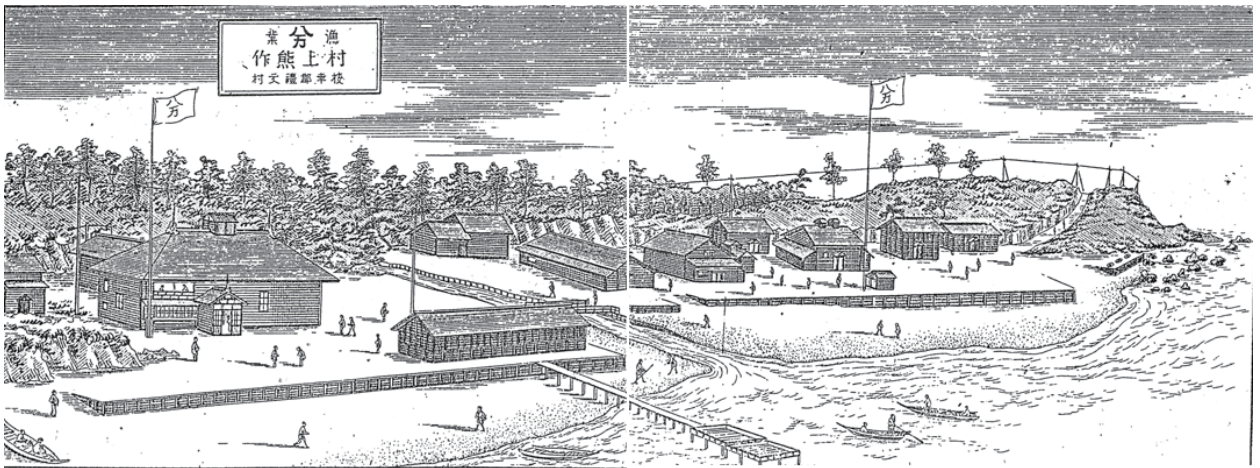


図4. 村上熊作のニウシトマリの漁場。「北海立志編」明治30年、高崎龍太郎より。

実兄村上晋之丞の漁場で漁業に従事したが、その間に漁場を申請し、二十四年（40歳）には別家した。そして幸先よく豊漁の二十五年（41歳）から独立自営の鯿建網漁をはじめた。その後連年豊漁に恵まれて資力を増し、礼文村ニウシトマリに家屋倉庫数棟を建築して漁業家としての揺ぎない地歩をかためた。二十九年（45歳）には鯿建網二統を自営するとともに…農業も試みていた。」（枝幸町史編纂委員会 1967 pp.529-530）。図4は熊作の漁場の描写である。また、図5のとおり、枝幸市街から南に約21kmの所に熊作の漁場（ニウシトマリ）があった。春はニシン漁、秋はサケ漁で多くのアイヌ人を含む30人から50人の漁師を雇い、礼文村のニウシトマリ（樹木の多い船のかかり澗）で網元として活躍、かなりの財を築いたようだ。

人生が充実してきた頃、米国から日食調査のために枝幸に来たトッド夫妻と親交が生れた。その頃の熊作（45歳）の家族は妻が42歳、長女もとは22歳、長男は20歳、次男寅太郎は18歳、三男辰四郎は13歳、次女のいかは9歳、四男は2歳の8人家族であった。

【米国のトッド夫妻との交流】

ア 当時の枝幸の風景と空気感

既に「メイベル・トッドの見た百年前の枝幸」（高島・山浦 2010）と題されて「枝幸研究」にその当時の枝幸についての掲載がされている。

枝幸村は明治25年（41歳）から日食調査のあった29年（45歳）までニシンの豊漁が続いており、街全体がその好景気に盛り上がり、また建物も新築が相次いでいたことをうかがわせる。トッド夫人の旅行記には当時の豊漁を背景に枝幸の人々の暮らしに活気がみなぎっている空気感が



図5. 熊作の漁場（ニウシトマリ）と枝幸市街地の位置関係。枝幸自然歴史マップを参考。

記述されており、私も「C & C」(Todd 1899)を、改めて原文から訳してみた。

<気候や人口>

「枝幸の空気は確かに濃霧地方からはずれている。道南地方よりも空気がかなり澄んでいる。」(Todd 1899 p.274)

「町の人口は遠い海岸の魅力としてニシンやサケ漁による道南地方からの多くの入植者たちからなる。わずか10年未満のうちに小さな村が誕生した。日本人は新しい地方への入植を好まない。春と秋に簡単に稼げる金だけが、彼ら(日本人)を本来住んでいる場所からこの土地へと惹き付けているのだ。この時期(春と秋)の枝幸の人口は1700人から4000人に増加していた。」(Todd 1899 p.282)

<村の日々の様子>

「(トッド夫妻の宿泊先あるいは校舎の)引き窓から村の生活が沢山と見えている。女たちは通りで洗濯をしていた。洗濯やその他の作業の合間に絶え間ないおしゃべりを楽しんでいる。はす向かいには素敵な広々とした地元の茶屋にある芸術的な街灯柱がみえた。屋根が張り出した縁側に可愛い若い女性たちが座っていて、お客たちが茶屋から出入りしている。毎晩、明るい提灯の列がゆれている。」(Todd 1899 p.281)

<実力者の家の様子>

「枝幸村の有力者広谷さんは海に面したところに広々とした家を持っている。家の正面にそってループに列をなした沢山の紙提灯が毎晩、驚くほどに飾られている。私たちが枝幸に到着したあとに、手の込んだ夕食に招待された。彼の小柄で可愛い花嫁は、高価な織錦の帯とグレーの絹の着物で見事に着飾っており、美しい掛け軸や素晴らしい火鉢、ブロンズ製の花瓶を背景に皆と少し離れて微笑みを浮かべて座り、まるで絵のように見えた。」(Todd 1899 p.290)

*広谷季太郎：北海道議員当選3回、漁業、造船所経営、砂金採取業。

<網元 (the master fisherman) のくらし>

「網元は大変なお金持ちで、30～50人を雇っている。その中には数人のアイヌもいる。実際の

仕事は網の仕掛けや獲物の水揚げである。網元の生活は多様で変化にとんでいる。冬はしばしば函館に住む。また、しばしば商談のために東京へ出かける。網元の子供たちは良い学校、しばしば大学へ進学している。家の中は全て美しく、上品な調度品で飾られている。北海道の可能性のある富はより広く高く評価されており、おそらく、原始的状态は長くは残されないだろう。これらの入植者たちは日本人たちであるが、アイヌたちの未開拓の集落は近くのあるところにあるのだが、アイヌ民族と十分な調和をもって暮らしているわけではない。」(Todd 1899 p.282)

イ アイヌ村への案内

トッド夫人のアイヌ村での生活用品類の収集は、動物学や人類学の分野で足跡を残したエドワード・シルベスター・モース(1838-1925、大森貝塚の発見者として有名)から依頼された。「C & C」(Todd 1899)には第25章から第28章までにアイヌの記述があり、トッド夫人も高い関心があったようだ。

当時、道南に住むアイヌの調査はモースや医師シーボルトの次男ハインリッヒ・シーボルト(1852-1908)とイザベラ・L・バード(1831-1904)により、既に行われているものの、枝幸は道北に位置する未開の土地で、誰も調査をしておらず、最北の枝幸に住むアイヌは全く知られていなかった。

「欧米人がほとんど訪れていないということで、彼女(トッド夫人)にとってはやりがいがあったといえるだろう。さらに、モースからの収集依頼は、メイベル(トッド夫人)の好奇心に火をつけることになった。」(梅本 2017 p.32)

19世紀末から欧米諸国は競って北海道をめざしていたという。

熊作は漁場でアイヌの方たちと漁業を営んだことから、彼らとは日常的に親しい関係だった。トッド夫人のアイヌ村への訪問は熊作も案内人の一人だった。写真2(左写真がサケ皮のコート、右写真の右上にネックレス)は「C & C」(Todd 1899 p.312 ; p.368)から転載した。

「C & C」(Todd 1899 p.312)によればトッド



写真2. 左がサケ皮のコート、右写真の右上にネックレス。「C & C」(Todd 1899 p.312 ; p.368) より転載。

夫人が枝幸から収集した殆ど (“The larger part”) のアイヌの生活用品類はモース教授に渡され、そして米国マサチューセッツ州ピーボディ博物館 (現ピーボディ・エセックス博物館: PEM) に収蔵されたと記述がある。

「トッド氏ハ夫人ト懇意ナ村上熊作氏トヲ伴ヒ、下幌別川尻にアイヌ小屋が三軒アリマシタガ、其処ヲ訪レタコトガアリマシタ。…イルリンカガ彫刻シタ刀ノ鞘、無名鳥ノ毛皮ヲ五円デ買ヒ求メマシタ。」(枝幸町史編纂委員会 1967 p.693、傍点筆者)

上記の「刀ノ鞘」は、「C & C」(Todd 1899

p.312) にもトッド夫人が “knife handles and sheaths” を買ったと記してあり、その存在を確認するため、私は米国ボルティモアに住む米国人の友人を通して PEM に問い合わせた。すると PEM が収蔵するトッド夫人関連の収集品 31 点の中から、サケ皮のコート、ネックレス、食器などの 8 枚の写真 (品数で 9 点) が PEM から送られて来た。

特に写真3のサケ皮のコートはアイヌの人々の高度な技術を感じさせる精細で美しいカラー写真で、写真4のネックレスの写真と共に本稿の為に PEM の好意で掲載が許可された。残念なが



写真3. Ainu artist coat, before 1896 Textile, silk, salmon skin Museum Purchase, 1897 E3390. Courtesy of the Peabody Essex Museum.



写真 4. AINU artist Woman's necklace, before 1896 silver pendant on wood backing, glass beads Japan Museum Purchase, 1897 E3407. Courtesy of the Peabody Essex Museum.

らナイフの柄と鞆は確認が出来なかったが、収集品が現在も米国に 100 年以上の時空を超え存在し、保存状態が大変よいことが確認出来て強い感動を覚えた。

1977 年にエドワード・モースの来日 100 周年を記念し、彼を称える展示会がピーボディ博物館で開催された。前掲のコートなど 10 点の品は記念の本“*Japan day by day* (日本その日その日)”に見ることが出来る (Hickman 1977 p. 166 ; p.172)。

この中で、前掲のサケ皮のコートは “Acquired for the Peabody Museum in the vicinity of Esashi, Hokkaido, by Mrs. Mabel Loomis Todd on the Amherst College Expedition to view the solar eclipse of 1896”、ネックレスは “Collected by Mrs. Mabel Loomis Todd in 1896 Gift to the Museum, 1897” と記してある。

ウ トッド夫妻から寄贈の直筆の揮毫 (きごう)

写真 5 は村上辰四郎秘蔵の揮毫である。熊作の家族と親しく交流があったトッド夫妻はお別れに、熊作へエミリ・ディキンソン (1830-1886) の詩「入日」を「枝幸」という土地柄にあわせて改変した詩、トッド夫妻のサインそして日付を直

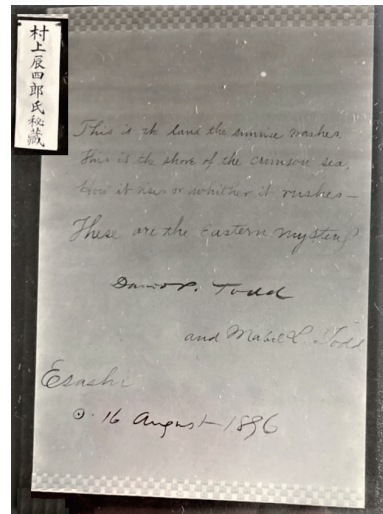


写真 5. 村上辰四郎氏秘蔵。トッド夫妻から贈られた「日の出」の揮毫。

筆した揮毫を贈った。夫妻が揮毫を贈ったと確認されているのは、この他には枝幸小学校 (枝幸大火で焼失) と竜寛寺 (現所在不明) の 2 か所のみで、個人では熊作だけであった。

詩は枝幸村に面した「オホーツク海」から昇る真っ赤な「日の出」の風景を表している。当時、トッド夫妻は海岸に面した広谷李太郎氏宅に寄宿しており (枝幸町史編纂委員会 1967 p.709)、想像の羽を広げてみると、朝に目覚めてその宿から見た海を臨んだ光景、あるいは宿から近い海岸線を散歩して見た光景だろうか。

夏の枝幸の「日の出」は東の「オホーツク海」から太陽が上り、西の「ポロヌプリ山 (標高 840m)」に沈む。国立天文台に問合せをしたところ、日食調査の当日の 1896 年 8 月 9 日の枝幸の「日の出」は 4 時 21 分だった。

【トッド夫妻から贈られた揮毫】

「ここは日の出が洗う土地

深紅の海の海岸

いかに太陽が昇り、どこに急ぐのか

これが東の神秘」

David P. Todd and Mabel L. Todd

枝幸 1896 年 8 月 16 日

(大西 2017 p.114)

【上記の詩の基となったエミリ・デキンソンの詩】

「ここは日没が洗う土地

黄色の海の岸辺

そこに太陽が昇り、どこに急ぐのか

これが西の神秘」

(1861年 No266) (大西 2017 p.113)

*下線が改変された部分

この詩は1864年エミリが匿名で「リパブリカン」紙に投稿され、発表されていた詩だ。そして、この詩はトッド夫人らが編集を手掛けた「エミリ・デキンソンの詩集第1集("Poem by Emily Dickinson, Series One")」(Todd & Higginson 1890 p.48)の一編である。トッド夫人らの手で日食調査の6年前に刊行されたことを考えれば、これを書いたトッド氏自身もこの有名な詩を覚えていた事は頷ける。

「枝幸町史 上巻」(枝幸町史編纂委員会 1967 p.790)には揮毫が「村内の医師村上辰四郎所有」(辰四郎は熊作の三男、1883年生)とあるが、寄贈された1896年は辰四郎が13才であったことから、当初、熊作が受け取って、のちに辰四郎が引き継いだと思われる。尚、揮毫はその後、芦別村上家から「オホーツクミュージアムえさし」に寄贈され、現在は同館に収蔵されている。なお、写真5の揮毫は寄贈前に芦別に住む村上家が撮影したものである。

【枝幸に感謝】

ア 教育や漁業等の人的・経済的支援と町づくりの支援

「長男の長作は家業に専念し、(熊作は)魚場のほか枝幸市街地に宅地数か所を所有し、家産の基盤は強固になり事業は伸張した。そして自費を投じて四・五百間の道路を開き、それに橋を架けて通行の便をはかるなど公益に尽し、人望を得て枝幸郡各村総代に当選、そのほか漁業組合委員・学校建築委員に推され、日清戦争軍資金・学校新築費寄附、ことに日蓮宗出張所建設について奔走するなど、枝幸にとっては忘れがたい草分けの一人である。」(枝幸町史編纂委員会 1967 p.530)

4・5百間の道路を現代のスケールにすると約

900mの距離で、決して道路として長くはないが、その道路の先にある川に橋を架けたことで、どれだけ当時の人々の生活に役に立ったかと思う。事業で儲けた財産を私利私欲にはしることなく、枝幸のために使うということは、誰でもできない精神と思う。

写真6は「各国観測班と多数の来賓を迎え、8月11日、(枝幸)小学校落成式が盛大に挙行された。そのあとの記念撮影」(枝幸町史編纂委員会 1967 p.693)と説明がある。前列右端に学校建設委員であった熊作、中央にトッド夫人、その右隣に天文学者デヴィッド・トッドがみえる。

枝幸小学校は2021年、131年目をむかえたという。道立図書館や枝幸町立図書館に問い合わせたが、70年史、90年史、100年史はあるが、熊作たちの学校建設委員たちの記述の可能性があるとされる50周年誌は見当たらないので、熊作たちの痕跡は確認できなかった。ただし乙忠部小中学校建設の背景については枝幸町史下巻に下記の記述がある。

「乙忠部地区の開拓は明治二十年ころ(36歳)からはじまった。村上熊作は明治十一年(27歳)枝幸に来て、同二十年乙忠部ニウスドマリに居を定め漁業のかたわら農耕にも従事した。高橋万吾・藤田新太郎…、翌二十六年(42歳)清水嘉一郎によって礼文駅通所が開設されると、市街の様相を呈するようになり、十五・六戸の部落に発展したのである。」(枝幸町史編纂委員会 1971

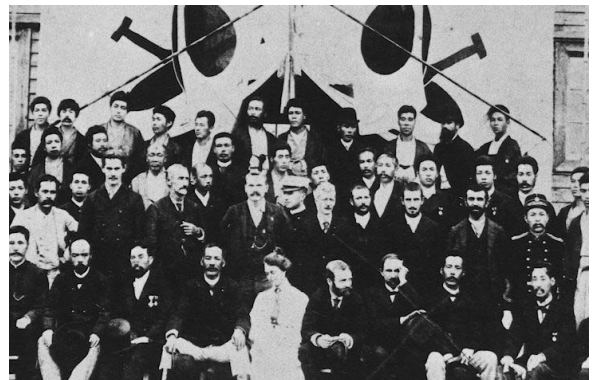


写真6. (枝幸) 小学校落成式後の各国観測班と来賓との記念撮影、1896年8月11日。

p.980、傍点筆者)

なお、トッド夫妻に可愛がられた熊作の次女いかは 23 歳の時、上記の高橋万吾の長男に嫁いでいる。

イ 当時の医療状況から西洋医学の導入に尽力 ＜多産と乳児死亡＞

熊作を支えた 2 歳年下の妻きんは 20 歳で長女、長男（同 25 歳時）、三男辰四郎（同 30 歳時）、次女いか（同 34 歳時）、四男（同 40 歳時）、五男（同 41 歳時）、最後は五男である私の祖父峰行（同 47 歳時）を産み育てていった。なんと、27 年間の長い間に 8 人（男 6 人と女 2 人）の子供たちを産み育て続けた。当時の女性達は生きている限りは沢山の子どもを産み、一生、子育てをしていたことに驚く。ただ五男は 1 カ月半で亡くなっている。そして熊作の長女もとは 4 人の子を産んだが、三男（長女 40 歳時）を除き、長男 8 カ月目、次男わずか 4 日目、四男 9 日目で全ての子が夭逝した。子の夭逝を前にどれだけ、もとと熊作夫婦は悲しい思いをしたらだろうか。

当時、日食調査のために派遣されていた帝国大学卒の堀礼治医師の活躍を目のあたりにし、枝幸に西洋医学の必要性を熊作夫妻ともとは切に感じたとに違いない。熊作夫婦ともとは辰四郎（三男、1883-1954）と峰行（六男、私の祖父、1900-1976）の息子たちを医師になるように尽力した。峰行は千葉医学専門学校への進学を勧められたが、性格に合わないとその道を諦めたと聞く。

「国民衛生の動向」によると、「乳児死亡」（生後 1 年未満の死亡）について「明治、大正には出生千対 150～160 であったが…毎年改善され、1 けた台となり、令和元年には 1.9 となった。」（厚生労働統計協会 2021 p.108）。当時は北海道に限らず全国的に、国民の栄養や経済状況、医療状況は脆弱であったと考える。

＜平均寿命＞

一方、平均寿命は現在、男性 81.41 歳、女性 87.45 歳（令和元年、2019 年）で世界トップクラスである。しかし、厚生労働省第 20 回生命表（厚生労働省大臣官房統計情報部 2007）によれば、当時の平均寿命は男性 42.8 歳、女性 44.3

歳（明治 24 年～31 年、1891 年～1898 年）であった。その平均寿命を考えれば、両親が高齢では子どもが授かっても育てられず、養子縁組となった事例が多くあったと考えられる。私の祖父 8 歳の峰行は結局、熊作 57 歳と妻キン 55 歳の時に 35 歳の長女もとの所に養子に行くことになる。

＜枝幸村の医療状況＞

日食調査に伴う枝幸への訪問者は国内外合わせて約 400 名と言われている。（枝幸町史編纂委員会 1967 p.671）当時の枝幸の医療状況と対応について枝幸町史上巻に記述があるので紹介したい。

「また当時医療関係では、前田という漢方医が開業しているだけの甚だ心細い状態だったので、わざわざ東京から、帝大で西洋医術の修業をした医師を招聘し、枝幸病院を創設して外人の病気に備えた。枝幸校落成式に名を列ねている帝国大学医師堀礼治がその人である」（枝幸町史編纂委員会 1967 p.692）

＜当時の日本の西洋医師への道＞

当時は漢方医が主流だったが、「医術開業試験」の導入（明治 8 年、1875 年）により、新規に開業する医師は西洋医学の知識が必須になった。これにより日本の医師の西洋化が画期的に進み「結果的には大正 5 年の廃止までに、総数 2 万人を超える大量の医師を創出していくのである。大正初年の医師の総数はおよそ 4 万人であったが、その内旧来からの医師（漢方医）約 1 万であり、西洋医師 3 万人のうち試験（医術開業試験）合格者（野口英世もこの試験で医師となった）は約半数の 1 万 5 千人を超え、医師社会における一大勢力を形成していたのである。」（メディア教育開発センター 1994 p.160）また、残りの西洋医師の 1 万 5 千人の内訳は医学専門学校等の卒業生約 1 万 2 千人、帝国大学卒業生は約 3 千人であった。

＜三男 辰四郎の西洋医師としての歩み＞

当時「医術開業試験」を受験するために、東京の受験予備校（現在の「日本医科大学」になる「済生学舎」あるいは、「東京慈恵会医科大学」となる「成医会講習所」など）があり多くの医師の

希望者が集まった。しかし、三男辰四郎は静岡や東京市（現在の東京都）の医院に住み込みで助手をしながら勉強し、試験を受けた。

当時、枝幸から東京までの交通の不便さもあるが、学業生活への仕送りは、大変なことだっただろう。熊作は網元として春はニシン漁、秋はサケ漁により、一代で財をなしたため、子供の教育に投資が出来たのであろう。

辰四郎は33歳の大正5年に医師登録がされて、枝幸で「内科、小児科、外科、産婦人科」の医院を開業し医師として働き始めた。大正14年の枝幸村では辰四郎を含め3名の医師がいた。（医事時論社1925 p.39）彼は46歳（昭和4年）の時に、サロマ湖のある下湧別村に移るまで12年間にわたり枝幸の医療の一端を担った。その後、下湧別村から幌加内村に移り、そこで20年間の貢献の後に、更に芦別に移った。

<西洋医師として辰雄が引き継ぐ>

辰四郎の息子辰雄（1923-1983）も医師になり、辰四郎の医院で働くようになった。辰四郎の医師としての志を継いだ辰雄は「おおらかで分け隔てがなく、生涯市井の人であり続けた人だった。」（辰雄氏の娘の談）

ウ 心の拠りどころとしての妙遠寺（みょうおんじ）の設立と運営に奔走

また、枝幸町史上巻の「草分けの群像」と題して「鴻池了旭（僧侶）」の項目の中には以下の記述あった。

「明治二十七年四月（43歳）、はじめて枝幸を訪れ、村上晋之丞方に宿をとった。そして枝幸が将来の繁栄を予約された地方であると見極めをつけ、ここに一寺を創建しようと思立った…長内幾三郎・村上熊作・大淵音松らが熱心に奔走して早速相談がまとまり、七月から工事にかかってわずか三カ月間で新築を終った。…」（枝幸町史編纂委員会1967 p.545、傍点筆者）

私は同寺の香川住職へ熊作に関する情報を求めて問合せをした。頂いた手紙には仏像写真が同封されており、「当寺開堂の際、村上晋之丞、熊作兄弟から寄進され内仏間に大切に安置されている。」と綴られてあった。

写真と同時に頂いた記念誌「妙遠寺 百年の軌跡」（香川1994）には「開基功労者 村上家について」というコラムが設けられおり、妙遠寺の創設と経営に対する熊作一家の温かい支援への記述を以下に見た。

「特に（熊作没後）辰四郎タカ夫妻、猛さん、モトさん、イカさんの兄弟姉妹、晋之丞さんの長男敬太郎（著者注：正しくは力太郎）キミ夫妻の心あたたかい御支援は感謝にたえない。」（香川1994 p.4）

村上熊作とその家族は枝幸に骨を埋めるべく「枝幸を第二の故郷」とし、寺の創建や運営の支援を積極的に行ったことがうかがえる。

熊作が35歳の時に枝幸から松前福山へ帰宅の折、積雪の斜里山道で日蓮上人の霊夢をみてその後、危機を脱した経験（枝幸町史編纂委員会1967 p.529）から、その後も熊作の中に日蓮宗への感謝の念を忘れなかったのであろう。

私の実家の菩提寺は富良野にあり、約50年前私の母親が知り合いの方にその寺の娘さんを紹介したところ、その後結婚された。その娘さんは妙遠寺のご住職の親戚だったことを今回、妙遠寺と交流を持つことで知り大変に驚いた。これもまた時空を超えて、熊作と見えない糸で結ばれていると感じた。

3 おわりに

曾祖父熊作は人生にもがきながらも、試行錯誤して生きた。そして、人生のどん底も味わって生きた時代もあった。幕末の時代に青春を生きた熊作は物騒な世ではあったが、下級武士の子だろうと商家の生まれだろうと、自分自身の力で道を拓くことができた時代だったのではなからうか。

外国船に船員として1年間、雇用され、小笠原や上海に足をのぼし、当時の日本人のほとんど誰も知らない世界を見聞し、体験している。枝幸に漁場をえてからは、地元のアイヌの方達を雇用して、一緒に仕事をした。

「ニシントマリ（著者注：正しくはニウシトマリ）の村上さんの家にトッド夫人が泊ったとき村上さんの娘いあさん（次女、9歳）を見知り、い



写真7. 熊作の漁場（ニウシトマリ）の跡。2021年夏。

かさんを是非養女に欲しいと交渉したが、村上さんの妻女がそれを許さなかったさうで、その話は結局駄目になったさうでした。」（枝幸町史編纂委員会 1967 p.710、傍点筆者）

本稿 p.1 にある写真1「日食観測後の観測メンバーと旧校舎」には、心なしかデヴィッド・トッドのいかを見る優しいまなざしが感じられる。当時、トッド夫妻には米国に一人娘（16歳、後のミリセント・トッド・ビンガム）がいた。もし、次女のいかが養女として米国に渡ったならば、どのような人生があったのだろうか。尚、ビンガム夫人はハーバート大学の「地理学」の分野で女性初の博士号を取得、トッド夫人と共編した「旋律の稲妻—新選エミリー・ディキンソン詩集（“Bolts of Melody: New Poems of Emily Dickinson.”）」（Todd & Bingham 1945）刊行等の活躍を遂げた。

熊作は今でいう「多文化共生」（国籍や民族などの異なる人々が、文化的な違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、共に生きていくこと）の信念のもとに、国籍や民族の垣根を越えて交流し、今までの失敗や探検などを糧に生きた。枝幸に居を構えてからは人生最後の地として、枝幸で精一杯に生きてきたのではないかと思う。

枝幸から松前への帰省の折に寒中の難所と言われている斜里山道の峠越え、道なき道をたどる

42日間以上の樺太探検など、それらの行動の善悪は別としても、知らないものを知るため、無謀ともいえるが、自己挑戦のために行動する力は現代を生きる子孫の我々にもそのDNAが伝承されているのだろうか。

熊作の消息を枝幸町史上巻で最後に伝える記述は、枝幸町のニシン漁が不漁にあえぐ明治末期の記述として「零細漁業者は早くついで去り、いずれも資本を擁して豊凶の波に動揺しないだけの力を備えたものが生き残っていたのである。」（枝幸町史編纂委員会 1967 p.1114）とし、その漁業者24名の一人に「オレタンラップ（尻が白くある岬）・村上熊作」を挙げている。（熊作はその漁場を当初のニウシトマリから、北1.5キロのオレタンラップに移ったのか、拡張したのかは不明）。

熊作は大正15年（76歳）に妻を亡くし、本人は昭和3年（78歳）に隠居、翌年昭和4年（1929年）12月枝幸で没した。享年79であった。辰四郎家族を始め子等に見守られて旅立ったと思われる。

私はどこからきたのか、誰のお陰で生きているのか、先祖からの命を受け継いで今、ここに私がいる。熊作の足跡をたどっていくうちに、そんなことをじっと考えた。

写真7は曾祖父村上熊作がかつて生きていた

というニウシトマリの漁場の跡である。2021年夏、その海岸に熊作の姿を求めて佇むと、そこには135年前にその地の漁場で熊作が大勢の人々と仕事をして暮らした痕跡は、全くなかった。爽やかな海風が心地よく流れる中、穏やかな波と共に透明な青い海が広がり、砂浜には青々とした草が生い茂り、打ち上げられた貝殻と昆布だけがあった。

しかし私の胸には何故か満ち足りた懐かしい思いが込み上げてきた。

偶然、エミリ・ディキンソンの詩をみつけた。それを、最後の結びとしたい。

■エミリ・ディキンソンの詩

「百年あとには
その場所を知るひとはだれもない
そこで演じられた苦悶も
平和のように静かだ

雑草が勝ち誇ったように広がり
見知らぬひと達が散歩にきて
昔死んだひとの
さびしい綴り字をよんだ

夏の野を吹き行く風は
その道のことを思い出す——
記憶の落した鍵を
本能に拾い上げてもらって——」

(1869年 No 1147) (中林 1986 p.57)

4 謝辞

「枝幸町史」と「松前町史」は詳細にわたる内容や写真、資料などそれぞれの郷土の歴史書としてすばらしいと思った。これらが無ければ、今回、この様にまとめることは出来なかったと言っても過言ではない。

芦別村上家の皆様からの村上家一族の広範囲な家系図を含む様々な情報提供、「オホーツクミュージアムえさし」訪問の折の高島孝宗館長はじめスタッフからの情報提供、記念誌「妙遠寺百年の軌跡」を送付して頂いた妙遠寺の香川一乗住職、ピーボデイ・エセックス博物館にある枝幸

関連のアイヌ生活用品の収蔵状況についての確認と写真の入手に尽力いただいた私達の長年の友人 Robert H Stiefel 氏と Sheila M Stiefel 夫人（米国メリーランド州ボルチモア市在住）、松前町教育委員会文化社会教育課 佐藤雄生氏から熊作の先祖の情報提供、「日本郵船歴史博物館」明野進氏から上海と小笠原航路についての情報提供、皆様へ心から感謝の意を表したい。

最後に、個人や組織への積極的な調査依頼や本稿に掲載の家系図及び地図などの作成に協力してくれた夫吉宮 徹に感謝する。

5 引用・参考文献

- 枝幸町, 2021, 『除籍謄本』. 枝幸町, 北海道.
枝幸町史編纂委員会, 1967, 『枝幸町史 上巻』. 枝幸町, 北海道.
枝幸町史編纂委員会, 1971, 『枝幸町史 下巻』. 枝幸町, 北海道.
医事時論社, 1925, 『日本医籍録』. 医事時論社, 東京.
梅本順子, 2017, 「メイベル・L・トッドの見た「アイヌ」-Corona and Coronet の作品を中心に-」『日本大学国際関係学部研究年報』 38: 29-37
大西直樹, 2017, 『エミリ・ディキンソン: アメジストの記憶』. 彩流社, 東京.
オホーツクミュージアムえさし, 2012, 『枝幸町自然・歴史マップ』. 枝幸町, 北海道.
香川一乗, 1994, 『妙遠寺 百年の軌跡』. 妙遠寺護寺会, 北海道.
上富良野町, 2021, 『除籍謄本』. 上富良野市, 北海道.
厚生労働省大臣官房統計情報部, 2007, 『厚生労働省第20回生命表』. 厚生労働省, 東京.
厚生労働統計協会, 2021, 「国民衛生の動向・厚生生の指標 増刊 2021/2022 Vol.68 No.9」. 厚生労働統計協会, 東京.
斜里町史編纂委員会, 1955, 『斜里町史』. 斜里町, 北海道.
高崎龍太郎, 1897, 『北海立志編』. 北嶋社, 函館市.

- 高島孝宗・山浦清, 2010, 「メイベル・トッドの見た百年前の枝幸」『枝幸研究』(2): 33-44.
- 中林孝雄, 1986, 『エミリ・ディキンソン詩集』. 松柏社, 東京.
- 富良野市, 2021, 『除籍謄本』. 富良野市, 北海道.
- 北海道, 1970, 『新北海道史 第2巻 通説1』. 北海道, 北海道.
- 北海道, 1971, 『新北海道史 第3巻 通説2』. 北海道, 北海道.
- 北海道, 1973, 『新北海道史 第4巻 通説3』. 北海道, 北海道.
- 松前町史編集室, 1974, 『松前藩と松前: 松前町史研究紀要6号』. 松前町, 北海道.
- 松前町史編集室, 1988, 『松前町史 通説編 第1巻下』. 松前町, 北海道.
- 松前町史編集室, 1997, 『松前史 年表』. 松前町, 北海道.
- 南富良野町, 2021, 『除籍謄本』. 南富良野町, 北海道.
- 村上誠一, 1948, 『芦別 家系図』. 個人作成.
- メディア教育開発センター, 1994, 「医師集団と非学歴層」『研究報告』(67): 157-184.
- Davies T, 2016. 『静かなる情熱 エミリ・ディキンソン』(DVD). アルバトロス・フィルム.
- Hickman M, Fetchko P, 1977, "*Japan day by day: an exhibition honoring Edward Sylvester Morse and commemorating the hundredth anniversary of his arrival in Japan in 1877*" Peabody Museum, Salem. https://archive.org/details/japandaybydayexh00hick_0/page/166/mode/2up. 参照 2022年1月6日.
- Johnson T H, 1991, 『EMILY DICKINSON The Complete Poems』. Great Britain by Cox & Wyman Ltd, London.
- Todd M L, Higginson T W, 1890, 『Poems by Emily Dickinson, Series One』, Roberts Brothers, Boston.
- Todd M L. 1899, 『Corona and Coronet: being a narrative of the Amherst eclipse expedition to Japan, in Mr. James's schooner-yacht Coronet, to observe the sun's total obscuration, 9th August, 1896』. Houghton, Mifflin and Company, Boston and New York.
- Todd M L, Bingham M T, 1945. 『Bolts of Melody: New Poems of Emily Dickinson』. Harper & Brothers, New York and London.